尾生の信

芥川龍之介

尾生（びせい）は橋の下に佇（たたず）んで、さっきから女の来るのを待っている。

見上げると、高い石の橋欄（きょうらん）には、蔦蘿（つたかずら）が半ば這（は）いかかって、時々その間を通りすぎる往来の人の白衣（はくい）の裾が、鮮かな入日に照らされながら、悠々と風に吹かれて行く。が、女は未だに来ない。

尾生はそっと口笛を鳴しながら、気軽く橋の下の洲（す）を見渡した。

橋の下の黄泥（こうでい）の洲は、二坪ばかりの広さを剰（あま）して、すぐに水と続いている。水際（みずぎわ）の蘆（あし）の間には、大方蟹（おおかたかに）の棲家（すみか）であろう、いくつも円（まる）い穴があって、そこへ波が

当る度に、たぶりと云うかすかな音が聞えた。が、女は未だに来ない。

尾生はやや待遠しそうに水際まで歩（ほ）を移して、舟一艘（いっそう）通らない静な川筋を眺めまわした。

川筋には青い蘆（あし）が、隙間（すきま）もなくひしひしと生えている。のみならずその蘆の間には、所々（ところどころ）に川楊（かわやなぎ）が、こんもりと円く茂っている。だからその間を縫う水の面（おも）も、川幅の割には広く見えない。ただ、帯（おび）ほどの澄んだ水が、雲母（きらら）のような雲の影をたった一つ鍍金（めっき）しながら、ひっそりと蘆の中にうねっている。が、女は未だに来ない。

尾生は水際から歩をめぐらせて、今度は広くもない洲(す)の上を、あちらこちらと歩きながら、おもむろに暮色を加えて行く、あたりの静かさに耳を傾けた。

橋の上にはしばらくの間、行人(こうじん)の跡を絶ったのであろう。沓(くつ)の音も、蹄(ひづめ)の音も、あるいはまた車の音も、そこからはもう聞えて来ない。風の音、蘆の音、水の音、――それからどこかでけたたましく、蒼鷺(あおさぎ)の啼く声がした。と思って立止ると、いつか潮がさし出したと見えて、黄泥(こうでい)を洗う水の色が、さっきよりは間近に光っている。が、女は未だに来ない。

尾生は険しく眉(まゆ)をひそめながら、橋の下のうす暗い

洲を、いよいよ足早に歩き始めた。その内に川の水は、一寸ずつ、一尺ずつ、次第に洲の上へ上って来る。同時にまた川から立昇(たちのぼ)る藻(も)の匂(におい)や水の匂も、冷たく肌にまつわり出した。見上げると、もう橋の上には鮮かな入日の光が消えて、ただ、石の橋欄(きょうらん)ばかりが、ほのかに青んだ暮方(くれがた)の空を、黒々と正しく切り抜いている。が、女は未だに来ない。

尾生はとうとう立ちすくんだ。

川の水はもう沓を濡しながら、鋼鉄よりも冷やかな光を湛(たた)えて、漫々と橋の下に広がっている。すると、膝(ひざ)も、腹も、胸も、恐らくは頃刻(けいこく)を出ない内に、この

酷薄(こくはく)な満潮の水に隠されてしまうのに相違あるまい。いや、そう云う内にも水嵩(みずかさ)は益(ますます)高くなって、今ではとうとう両脛(りょうはぎ)さえも、川波の下に没してしまった。が、女は未だに来ない。

尾生は水の中に立ったまま、まだ一縷(いちる)の望を便りに、何度も橋の空へ眼をやった。

腹を浸(ひた)した水の上には、とうに蒼茫(そうぼう)たる暮色が立ち罩(こ)めて、遠近(おちこち)に茂った蘆や柳も、寂しい葉ずれの音ばかりを、ぼんやりした靄(もや)の中から送って来る。と、尾生の鼻を掠(かす)めて、鱸(すずき)らしい魚が一匹、ひらりと白い腹を翻(ひるがえ)した。その魚の躍った空にも、疎(まばら)ながらもう

星の光が見えて、蔦蘿（つたかずら）のからんだ橋欄（きょうらん）の形さえ、いち早い宵暗の中に紛（まぎ）れている。が、女は未だに来ない。

……

夜半、月の光が一川（いっせん）の蘆と柳とに溢（あふ）れた時、川の水と微風とは静に囁（ささや）き交しながら、橋の下の尾生の死骸を、やさしく海の方へ運んで行った。が、尾生の魂は、寂しい天心の月の光に、思い憧（こが）れたせいかも知れ

ない。ひそかに死骸を抜け出すと、ほのかに明るんだ空の向うへ、まるで水の匂(におい)や藻(も)の匂が音もなく川から立ち昇るように、うらうらと高く昇ってしまった。

……

それから幾千年かを隔てた後(のち)、この魂は無数の流転(るてん)を閲(けみ)して、また生を人間(じんかん)に託さなければならなくなった。それがこう云う私に宿っている魂なのである。だから私は現代に生れはしたが、何一つ意味のある仕事が出来ない。昼も夜も漫然と夢みがちな生活を送りながら、ただ、何か来(きた)るべき不可思議なものばかりを待っている。ちょうどあの尾生が薄暮(はくぼ)の橋の下で、永久に

来ない恋人をいつまでも待ち暮したように。
（大正八年十二月）

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９８６（昭和61）年12月１日第１刷発行
　　１９９６（平成８）年４月１日第８刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９８年12月８日公開
２００４年３月７日修正

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。